２０２２年４月２４日（復活節第２主日、Ｃ年）牧師メッセージ
「疑いの先の信仰告白」

（ヨハネによる福音書 20:19-31）

司祭ヨセフ太田信三

ご復活の主イエスは、「あなたがたに平和があるように」と弟子たちの真ん中に現れてくださいました。しかし、なぜかそこに立ち会うことができなかったトマスは、主のご復活を信じようとはせず、復活が事実だということの確証を求めました。

わたしはトマスがいてくれて本当に良かったと思います。トマスのおかげで、信仰の一つの大切なあり様が示されたように感じられるからです。もしかすると、トマスは他の弟子たちがご復活の主イエスに会ったことが羨ましくて仕方がなかったのかもしれません。他の弟子たちに嫉妬するほど主イエスに会いたかった彼は、まるで子どものようにふてくされて、「傷を見るまでは信じない！」などと頑なになってしまいました。わたしは自らを省みるとき、そんなトマスのように素直に、嫉妬して、ふてくされるほどに主イエスを求めているだろうかと思わされます。何よりも、わたしたちはトマスがいてくれたおかげで、主イエスの優しさを知ることができます。傷を見るまで信じないと言ったトマスにも、主イエスは現れ、ご自分の傷に触れるようにと声をかけてくださいました。ここに主イエスの愛の深さを感じずにはいられません。その愛に触れたからこそ、「信じないものではなく、信じるものになりなさい」と言われたトマスは、傷に触れるまでもなく、「わたしの主、わたしの神よ」と言いました。つまり、トマスは主イエスを「神」として信仰告白したのです。これは、それまでどの弟子たちもしなかった最初の信仰告白です。トマスは、疑いました。しかし、疑いの先に主イエスに出会い、その愛に触れ、主イエスへの深い信仰へと導かれたのです。

信仰において、疑問を抱くことは決して悪いことではありません。それどころか、その疑問を主にぶつけるなら、トマスのように深い信仰へと迎えられます。しかし、主に疑問をぶつけぬままに自己完結してしまっては、信仰の旅はそこでストップしてしまいます。